

中 ②

理想と現実、そして実現

小川南中学校

二年

菊地 きくぢ

心愛 こころあ

私には、二つ下に弟がいる。学校では人気者で、いつも家族を笑わせてくれる。

弟には障害がある。両足の指がくっついて産まれてきたのだ。私が幼稚園に通っていた頃、弟が手術した。何時間にも及ぶ、大手術だと聞いていた。手術の大変さも、両親が泣いて嬉ぶ理由も分からなかった。私は、弟の足を見て、「宇宙人みたい」と言ってしまった。

誰も怒らなかったが、今となっては大きな棘となつて心に深く刺っている。退院して歩けるようになった時から、少し弟に気を遣うようになつてしまつたと思う。一緒に遊ぶ時、できるだけ足を使わない遊びをしたり、歩かせないようにしたり、それが弟にとって一番の事だと思つたのだ。

弟が幼稚園、小学校と上がると、歩き方が変。「みんなと同じじゃない」といじめられてしまうのではないかと心配だ。幸い、

誰からもそんな事は言われてないし、いじめ  
られもしなかった。しかし、弟から「特別扱  
いしないで」と言われた。特別扱い、それは  
弟にとって差別と同じ事だと思う。私と変わ  
らなく生活しているのに、私自身が障害者と  
いうレッテルを貼ってしまっただせいで「みん  
などは違う」と意識してしまっただのかもしれ  
ない。障害をもっている人は、私たちが思っ  
ているより弱くない。なぜなら、想像を超え  
る試練を乗り越えてきたのだから。弟の一言  
で、障害をもっている人に対する見方が変  
わった。

私たちの社会には「障害者」という枠があ  
る。差別や偏見をなくそうと呼びかけても、  
消えないのが現実だ。けれど、同じように人  
間で同じように生きているのだ。これは、罪  
を犯した人にも言える事だと思う。犯罪をし  
た人が罪をつぐない、一生懸命に生きようと  
しても、無意識のうちに「犯罪者」と偏見を  
もち、差別する。そうした偏見がもたらすの

は、再犯だ。

あなたは、罪を犯した人の気持ちを考えて  
事がありますか？自分の事を分かってくれる  
人、分かってくれようとした人がいなかった  
かもしれない。犯罪をしてしまった事を後悔  
しているかもしれない。障害をかかえる人と  
同じで、やりたくて、やってしまったけれど  
はないかもしれない。このように考えると、  
色々な理由が考えられる。「悪者」と決め付  
ける前に、一度踏み留まり考える事が大切な

事だと思ひ。もちろん、犯罪に手を染めよう  
としている人も。

私たちは、いつ自分がまちがった行動をと  
り、「犯罪者」と言われるか分からない。自分  
には関係ない、と思つてしまふかもしれない。  
が、「あの子が憎い」「手に入れた」と一度  
は思つた事があるだろう。塵が積もれば山と  
なる、というように、そのような思ひが積も  
つて心に余裕がなくなり、犯罪に手を染めて  
しまふのだ。犯罪の一番怖い事、それは、被

害者の人生も加害者の人生も、奪われてしま  
う事だ。

でも、犯罪は防ぐことができる。人は変わ  
る事ができるのだから。

偏見の目で見るのではなく、一人の人間と  
して人を見る事ができる社会になるように、  
私は願う。